

図書館報

第128号
平成25年2月22日
大分工業高等専門学校
図書館
大分市牧1666番地
TEL 097 (552) 6084
FAX 097 (552) 6786



シンガポール・ポリテクニク校受入れ事業

〈 も く じ 〉

題字「図書館報」	（校長 古川 明德 書）	1
扉写真	都市・環境工学科 前 稔文	1
読書のすゝめ	校長 古川 明德	2
おおいた文学散歩(8) 城山三郎「指揮官たちの特攻—幸福は花びらのごとく—」を歩く	一般科文系 山田 繁伸	3
学生図書委員会の活動	図書委員長 5S浅野早紀・図書副委員長 5S本田晶子	4
2012年度シンガポール・ポリテクニク校受入れ事業を終えて	都市・環境工学科 亀野 辰二	5
思い出の一冊 梓にはまらない発想を持ち続ける大分人～「日本民話 吉四六さん」～	一般科理系 二宮 純子	6
私たちの会津戦争 星亮 一著	都市・環境工学科 横田 恭平	7
平成24年度学生図書委員名簿		8
平成24年度読書感想文及び貸出上位者・クラス表彰者		8
編集後記	図書館長 補佐 プロハースカ・ズデネク	8

読書のすゝめ

校長 古川 明德



高専は、実践的技術者の育成をめざし教育・研究を行う場です。また高専の卒業生諸氏のモノづくり現場での高い能力の発揮により、高専教育は社会からの高い評価を戴いております。ただ高等教育における大学との違いは、語学も含めた教養教育かと思えます。しかし教育課程に差があっても、大学と高専の卒業生に教養自体にレベル差があるとは思っていません。これはひとえにこれまでの高専卒業生が、自学で教養を身に付けてこられた成果かと思えます。

では「教養人」とは何でしょうか。それは単に「もの知り」「知識人」「ウンチク王」ではありません。経験・鑑賞・読書等を通して、感じそして考える、豊かな心の持ち主ではないでしょうか。したがって教養人は、金持ちとは違い、一瞬でなれるものではありません。金持ちの振りはできますが、教養がある振りは、数分で化けの皮が剥がれます。昔々、高校時代に先生から「君らは無知・無教養なのだから黙って聞く側に回れ。そして聞き上手になれ。」と言われたことを記憶しています。コンピュータ画面や機械に向かって黙々と設計開発・製造する技術者も必要ですが、高専生はその分野のリーダーとしてグローバルに羽ばたいて頂かねばなりません。ある時はロンドンのパブでシェクスピアを語り、そしてウィーンの喫茶店でバッハを論じ、ある時は北京の飯店で孔子を語って欲しいものです。

教養は、経験・鑑賞・読書等を通して得られるものと申しましたが、「読書のすゝめ」を本文の題目としましたように読書こそ教養を身に付ける第一歩と考えています。高専生は、当然、技術者としての専門性を高めるために、専門書、学習参考書・解説書、そして論文等を読むことが求められます。それとともに社会ニーズや技術動向や社会の流れに乗り遅れないためにも情報や資料収集は欠かせません。電子新聞でも結構ですので新聞を毎日読む習慣は大切かと思えます。そして文学や芸術など様々な分野の書籍を読む癖も付けて下さい。そのためには図書館を活用することが極めて経済的です、読んで自分に合わないと思えば止めて返却すればよいことですし、読み捨てができます。とにかく読書によって、時空を超えた様々な体験ができ、しかもその体験は、自分の時間や感情に合わせて行うことができます。これにより知識を得、その背景を考えることで知恵を得、ひいては人間・自分を知ることができようかと思えます。一点だけ注意しておきます

と、本を読んで真剣に考えることは大切ですが、悩んではいけません。読んだ本は決してバイブルではありませんので、「そういうこともあるのだ」、「そんな考え方もあるのか」と開き直りと寛容な心も持っておいてください。

かく申す私も読書を好んでする方ではありませんでした。それで学部・大学院生時に私の英語力の弱さからか、就職担当の先生から「君はこれから文学書等を原書で読む癖を付けなさい。」と強い指導を受けましたし、友からは「おまえ、ヘルマンヘッセも知らないのか。」と大笑いされ、恥ずかしい思いもしました。それゆえ、初老の域に入ろうとする今となっては遅かりしですが、私は「教養人」とはなれなかった気がします。その教養人になり損ねた私の読書歴を披露しますとつぎのようになります。まず幼少期では、市の図書館から借りて伝記物を読みあさっていました。「豊田佐吉物語」の苦勞して自動織機を造る話は、私が工学の道を志すきっかけを与えてくれたように思います。中学／高校の若年期は、標準的な生徒として夏目漱石に没頭し、「吾輩は猫である」に始まり「三四郎」「それから」「門」…と読破し「則天去私」という言葉に憧れていました。つぎなる、恋多き青年期は、なぜか亀井勝一郎や石川達三の恋愛論を読まされ、「あれは男目線の論理だ」などと議論した記憶があります。また先輩から「社会人となるにはこれを読んどけ」と三国志を全巻ゴソッと渡されて黙々と読みふけたときもありました。ただ初めの数巻までは魏・呉・蜀の覇権争いに絡んだヒーロー達にいろいろな思いを込めて読んでおりましたが、次から次に繰り出される「権謀術数」の世界にウンザリし、読みはしましたものの最後まで好きになれませんでした。そして社会人になってからは、専門書・論文を読むことが大半で、出張中の車や機内で軽本を読む程度で、文学からは遠ざかってしまっていたように思います。この文を書きながら、昔に戻って文学書を読んでみようかという気になりました。さて、どれから読んだらよいのやら・・・、まずは図書館に行ってみることにしましょう。

さて大分高専に目を向けますと、本校の図書館は1,702㎡の面積を有し、1階部分には図書及びメディア閲覧室、談話コーナーがあります。そこには現在、学生閲覧用として67,549冊の図書・印刷物が配置され、昨年ですと年間279日の開館日数に対して延べ数で、一般市民1,121人を含めた学生・教職員全体で40,126人の入館があり、貸出冊数/人数で9,930冊/4,198人に利用いただきました。また、1階のフロアには学生諸君の英語力アップを期待して英文多読コーナーも設けられています。これからも、より多くの方々に利用されることを願って、学生諸君の人生の道標となり教養を高める書籍も増やして充実を図って参りたいと思います。

皆さんもたくさん本を読んで教養人になりましょう。

おおいた文学散歩 (8)

城山三郎『指揮官たちの特攻－幸福は花びらのごとく－』を歩く

一般科文系 (国語科) 山田 繁伸

津久見湾の北に位置する久保浦地区を目指す。聖徳小学校を通り過ぎ、1キロも行くと久保浦地区に入る。左山手には蜜柑畑が広がり、右手奥には津久見のセメント工場群が見える。目指すはお墓。作品最後部分に次のように描かれている。

蜜柑畠への急な山道がはじまるところに、中津留明はりっぱな墓を建てた。

個人の墓というより、碑に近く、明としては息子だけではなく、共に散った部下たちの霊も一緒に弔う思いであったのではないか。

まわりには、さまざまな花が咲き、鶯、目白、鶉などが、高く低く鳴き続けていた。

70余年生きてきた私は、そうした中に立っていて、ふっと思った。

20歳前後までの人生の幸福とは、花びらのように可愛く、また、はかない。

その一方、かけがえのない人を失った悲しみは強く、また永い。

花びらのような幸福は、花びらより早く散り、枯枝の悲しみだけが永く永く残る。

それが、戦争というものではないだろうか一と。

立派なお墓の主は、中津留明の一人息子である中津留達雄大尉である。享年23歳。墓石の「少佐」は、没後の昇進であろう。しかし、遺骨はこの墓にはない。神風特別攻撃隊の指揮官として沖縄の地で戦死？したからである。戦死の「？」は、戦死でないとも言えるからである。諸説あるが、中津留達雄大尉が指揮する特攻は、昭和20年8月15日の夕刻に大分を出撃した。つまり、終戦の正午以降、飛び立ったことになる。

この作品は、中津留達雄ともう一人の特攻指揮官関行男を主人公にしたドキュメントノベルである。特徴は、作者城山三郎自らを作品に織り込み、鎮魂の思いを深くしている点である。理工系の学生であった城山は徴兵猶予の特典はあったが、それを辞退し海軍に志願した。終戦時は、海軍特別幹部練習生として、伏龍部隊に所属していた。伏龍も特別攻撃隊である。城山は特攻出撃寸前に終戦となり、死を免れた。中津留や関、そしてその遺族に寄り添う城山の筆致が際立つ。

最後の特攻指揮官として出撃した中津留に対して、関は特攻第1号の指揮官となった。二人は、海軍兵学校の同期で、宇佐海軍航空隊での実用機教程で共に学んだ仲間である。新妻を残し、青年指揮官として出撃した年齢も同じ23歳であった。

関行男大尉は、宇佐での教程を終えると、霞ヶ浦航空隊の教官となった。その後、台湾の練習航空隊へ移る。そして、台湾には3週間いて、フィリピンのルソン島のマバラカットという大きな基地に移動する。こ

こでは、もはや教官ではなく、実戦の零戦部隊に配属される。そこで「250キロ爆弾を装着した零戦の編隊を指揮し、レイテ方面のアメリカ機動部隊めがけて、はじめての体当たり攻撃を執行せよ」との命令を受ける。昭和19年の10月のことであった。親一人子一人、そして妻帯者の関が特攻に選ばれた謎も指摘されている。マバラカットを飛び立った5機は、米軍艦隊に体当たりした。特攻は米軍に自殺攻撃スーイサイド・アタックと恐れられた。関の指揮した敷島隊は、こうして神風特別攻撃隊の第1号となった。しかし、戦況は好転することもなく、次々に特攻が実施されてゆく。たとえば、宇佐航空隊からの出撃は次のように描写されている。

昭和20年4月はじめの宇佐航空隊の保有機数は157機と記録されている。

その中から、山下大尉らを第一次隊とする「八幡護皇隊」が、串良や国分基地を経由して沖縄近海の敵艦船を目標に出撃。さらに第二、第三などと続き、5月11日までに九波にわたる特攻によって、154名が還らぬ人となった。

中津留達雄の出撃は、大分からだった。一時宇佐から鳥取の美保基地に移っていた中津留たちは、大分に戻された。中津留は、生まれたばかりの娘鈴子に会った。しかし、鹿屋から陣地変更によって大分に移っていた第五航空艦隊の司令長官宇垣纏が出撃命令を下した。原爆投下、ソ連参戦のなか、ポツダム宣言の正式受諾も決まってゆく。宇垣は、それらを無視するかのように出撃命令を中津留に伝える。中津留の指揮する11機が、昭和20年8月15日の夕刻、大分から飛び立った。司令長官も中津留機に同乗した。最後の特攻が飛び立った場所は、現在の大洲総合運動公園である。公園内に、神風特別攻撃隊発進之地の石碑が建てられている。碑の裏には沖縄近海に散った18人の氏名が刻まれている。55歳の宇垣長官以外はすべて20歳から23歳までの若者である。父親の明は「宇垣さんが一人で責任をとってくれていたらなあ」といつも口にしていらした。 (引用は新潮文庫による)



中津留達雄の墓



「神風特別攻撃隊発進之地」の石碑

学生図書委員会の活動

図書委員長 5S浅野 早紀、図書副委員長 5S本田 晶子

学生図書委員は各クラスから2人ずつ選出され、全体として40人で構成されています。主に、図書館行事の主催や、図書館とクラス間の連絡などを行っています。毎年、図書委員主催の行事として「ブックハンティング」や「読書会」を開催しており、学生に本をたくさん読んでもらいたいと思い活動を行ってきました。そこで今回は、図書委員会の主要な活動3つと、図書館が主催の「多読賞」、「読書感想文コンクール」の紹介をしたいと思います。

1つ目の活動は「ブックハンティング」です。ブックハンティングは学生図書委員会が直接書店に出向き、図書館の本を選定する活動です。文芸書や実用書、参考書と図書委員それぞれ選ぶ本のジャンルは様々なので、学生の視点で選んだ本を是非学生のみなさんに読んでもらいたいと思っています。そのため本は選定するだけでなく、紹介用のPOPを作ってもらって掲示しています

2つ目は「読書会」です。例年までの読書会では指定図書について意見を言い合う形をとっていましたが、事前に本を読む時間がないなどの意見をいただいております。そこで、今年度の読書会では自分の好きな本をみんなに紹介しながら本についての話をするという会に変更してみました。事前に情報を知ってい

たわけではありませんでしたが、一つの本からたくさん本についての話題に広がり、楽しい時間を過ごすことができました。

よりたくさんの人に参加して頂けるような会にするため工夫を重ねたいと考えています。

3つ目は「大分県高等学校図書委員研修会への参加」です。大分県の高等学校の図書委員が集まり、課題図書についての感想交換会や、技術講座を通し、自校の図書館活動をより活発にすることを目的としています。本校の図書委員会は毎年、この研修会に参加しており、平成24年度は村上慶行君（機械工学科3年生）、小野将寛君（都市・環境工学科2年生）、山内杜夫君（情報工学科1年生）の3名が参加しました。他校の図書委員との貴重な交流の場になったのではないのでしょうか。

また、本校の図書館では、毎年、図書借り出し数の多かった学生に多読者として、「多読賞」を与えており、受賞者は読書感想文コンクールの受賞者とともに、校長先生から表彰されます。

こうした図書館の活動を通して、本校の学生の皆さんにより一層読書を楽しんでもらえるように、図書委員一同これからも励んでいきます。



ブックハンティングで作成したPOP



読書会

2012年度シンガポール・ポリテクニク校受入れ事業を終えて

都市・環境工学科 亀野 辰三

今年度のシンガポール・ポリテクニク校（以下、SP校）受入れ事業は、2012年9月25日（火）～10月1日（月）までの1週間、都市・環境工学科の1年生から4年生までの有志37名で構成された「SP生受入れ実行委員会」が窓口となって企画から運営までを行いました。実行委員長は志藤暢哉君（4C）、副実行委員長は田中敦士君（4C）です。2009年、2011年に続き、今回で3回目となる受入れ事業ですが、過去の先輩方が培ってきたノウハウを活かしながら、今年度も心温まる国際交流を楽しみました。以下は、学生実行委員が直接参加したプログラムについての概要と感想ですが、この他にも「大分県知事表敬訪問」、「日本文化体験」（写真1）、「研究室体験授業」（写真2）、「工場見学」等を実施しています。

《歓迎会》

9月25日（火）、12時30分よりSP校のローズ先生と12名の学生の歓迎会が催されました。古川校長の歓迎の挨拶から始まり、SP生受入れ実行委員長の志藤暢哉君から歓迎の挨拶があり、続いてローズ先生の挨拶ならびにSP生の自己紹介、都市・環境工学科の一宮一夫学科長の挨拶と受入れ実行委員の簡単な自己紹介があり、記念撮影の後、昼食を兼ねた懇談が始まりました。

《SP生によるシンガポール紹介》

9月26日（水）アカデミックホールに1Cから4Cの学生が集まり、14時からSP生によるプレゼンが行われました。シンガポールの歴史、地理、文化、生活環境など詳しい紹介がありました。その後Q&Aがあり、現在SP校に留学中の喜久山世航君（5C）について簡単な現況報告がありました。プレゼンやその後のQ&Aが活発に行われ、時間が10分ほどオーバーするほど盛況の内に終了しました。

《視察旅行》－別府～九重夢大吊橋～湯布院の旅－

9月29日（土）は、あいにく台風17号の影響により断続的に雨が降りましたが、予定どおりに視察旅行を行いました。9時に学校を出発し、別府の海地獄を見学（写真3）。その後、九重夢大吊橋へ向かいました。雨と風が激しくなりましたが、SPの全学生

とローズ先生、数名の本校の学生が同橋を渡りました。昼食はやまなみ牧場でとり、日本式のバーベキューはSPの学生達に大変好評でした。昼食後、希望者が九重星生ホテル内の温泉を体験しました。その後、湯布院の「みちの駅湯布院」においてショッピングを楽しみました。ショッピングの後、大分市に戻り、「あけのアクロス」内にあるレストランで夕食をとりました。

《視察旅行》－臼杵方面歴史の旅－

9月30日（日）の午後は臼杵市内の歴史施設の見学に行きました。まずは臼杵石仏に行きました。仏教施設はシンガポールにも数多くあるようですが、磨崖仏は珍しいようでした。彼らが特に興味を示したのは、黄金色の田んぼと畔に咲く真っ赤な彼岸花とのコントラストが鮮やかな田園風景でした。ちょうどコスモスも満開で、日本の田舎の典型的な秋の景色を写真に収めている姿がとても印象的でした。その後、臼杵市内の古い街並みを見学しました。日本人の昔の生活はとても新鮮であったようで、お寺や蔵などの日本の古い建物や街並みに関心を示していました。

《送別会》

10月1日（月）の10時から会議室で送別会が開催されました。まず、副実行委員長の田中敦士君が挨拶し、ローズ先生からお礼の言葉がありました。その後、SP生一人一人に記念品が手渡されました。引き続き、SP生一人一人によるお礼と感謝のスピーチ、これを受けて都市・環境工学科学学生代表として上野貴行君（4C）、タナワット君（4C）から送別の言葉が送られました。記念撮影、食事、ビンゴゲームを経て、英語で書いた色紙をSP生一人一人に贈呈したところで会場は最高に盛り上がりました。最後に清水教務主事から閉会の言葉をいただき、1週間にわたる研修のすべてが終了しました。SP生は12時15分に博多に向けてバスで出発しましたが、バスが発発するまでSP生、本校の学生とともに別れを惜しみ、お互いが見えなくなるまで何度も手を振っていました。



写真1 日本文化体験（書道体験）



写真2 研究室体験授業
（大野川での水環境調査）



写真3 視察旅行（別府海地獄）

思 い 出 の 一 冊

枠にはまらない発想を持ち続ける大分人
 ～「日本民話 吉四六さん」～
 一般科理系 二宮 純子



1 はじめに
 図書館報の“思い出の一冊”コーナーへの原稿依頼を頂いてから、「私の“思い出の一冊”とは…何だろう」と考えました。すると、「自分の本棚を見られるのは、自分の中を見られるみたいで嫌だ」と言っていた友人の言葉

を思い出しました。皆さんは、どうでしょうか？図書館報で、先生の“思い出の一冊”を知って、何を感じますか？

「へえ～、こんな本を読んでいるのか」と知った上で、
 「うわあ、自分と同じ趣味だ」
 「げげえっ、こんな趣味してんだ」
 「こんな本を“思い出の一冊”にしているのか」
 「やっぱり、難しい本を読んでいるんだなあ」
 などなど、感じ方はいろいろでしょう。どのような受けとめられ方をされても、やはり、“思い出の一冊”を告白する側からすると、恥ずかしいものです。そんなことを思いながら、今この原稿を書いています。

2 大分といえば！日本民話「吉四六さん」

大分高専の皆さんは、このお話をどのくらい知っていますか？「柿の見張り番」「天昇り」などは有名です。この本は、大分県出身の母が私に買い与えてくれたものですが、吉四六さんのとんち話は幼少の私には不思議に思えてなりませんでした。

例えば、小さい頃の私は「お魚が焼けるのをみていてね」と言われて、焦げるのを見てみると、「どうして、火を消さないの！」と怒られます。「みていてね、と言われたから、見ていただけ」と答えれば、さらに「口答えをするな」怒られます。私は自分が体験すること（実体験）と吉四六さんのお話が全くシンクロしないことに、不思議な感覚をおぼえました

また、大人たちは、「屁理屈を言うてはいけない」「人を騙してはいけない」「苦労は買ってでもしろ」などと、吉四六さんのお話とは全くと言っていいほど、真逆なことを言って教育してくるのです。「吉四六さん」を買い与えた母ですら、他の大人たちと同じようなことを言うてくるのですから、小さい私はますます分からなくなりました。

しかし、大きくなってから「吉四六さん」のお話への思いは大きく変わりました。それは、「人は少しでも楽をしたい、少しでも儲けたい、少しでも得をしたいと考えているのに素直に言葉や行動に出すのは恥ずかしいので、そんな怠慢な考え方を隠しながら生きている。吉四六さんはオリジナルの発想で、そんな人の弱さや狡さを笑いに変えて気づかせてくれるお話だ」ということです。

3 理系タイプだった！？

「吉四六さんの水風呂」は、理系人の心をくすぐるお話です。知らない方のために、簡単に内容を紹介します。

とても暑い日、吉四六さんは、年貢を納めるために村人たちと馬でお米を運んでいました。馬は重い米俵を背負って、ヘトヘトになっていました。馬の水飲み場になっていた泉は、日照り続きのために水位が下がり、馬の口があとちょっとの所で届きません。このままでは馬が倒れてしまうと、村人たちは困っていました。そこで、吉四六さんは裸になって泉に入ります。村人は、「掘っても水はわかないよ」と言って笑います。吉四六さんは、「うひゃーっ、ちょっと冷たいが、こりゃいい気持ちだ。さあ、これで水かさが増したぞ。もう何人かが手伝ってくれりゃあ、馬の口が届くはずだ」と言い、村人が一緒に泉に入ること馬も無事に水を飲みました。（チャンチャン）

さあ、皆さん気づきましたか？

そうです。

吉四六さんは、理系タイプです、よね！？

体積を増して、水位を上げるなんて！その上、暑い日は、馬だけでなく自分（人間）も暑さでヘトヘトです。馬が水を飲めるという解決策だけでなく、自分も水浴びしてハッピーになれるアイデアを思いつくなんて！素敵です！

大分高専の学生さんには、吉四六さんのように枠にはまらない発想をもち、なおかつ人や命あるものをハッピーにする「ものづくり」をして欲しいと願っています。

思 い 出 の 一 冊

女たちの会津戦争

星 亮 一 著

都市・環境工学科 横田 恭平



平成25年の大河ドラマは、新島八重（1845－1932）が主役の「八重の桜」である。新島八重の旧姓は山本といい、幕末から明治初期に活躍した人で、出身は会津若松（現在の福島県 猪苗代湖周辺）である。親の影響からか砲術を得意とし、七連発銃を操って

いた女性である。今回紹介したい一冊はこの新島八重を始めとした会津の女性が壮絶に戦い抜いた会津戦争を題材とした「女たちの会津戦争」（平凡社）である。その中で女性の強さが書かれており、その点を紹介していきたいと思う。

まず会津戦争（1868年8～9月）とは、1868年から始まった新政府と旧幕府勢力間の戦争である戊辰戦争で東北戦争最後の戦いである。会津藩は旧幕府勢力であった。会津藩は16～17歳の武家の男子で構成された白虎隊や女子の娘子軍も参加した総力戦の戦争で、会津藩の城（鶴ヶ城）にて籠城戦となったが、最終的には9月22日に開城し、会津藩は降伏した。

その籠城戦で活躍したのが女性である。籠城した女性は、炊事、看護にとどまらず弾薬の製造にも及んだ。弾薬の原料は鉛と火薬で、城にあったものに加え、敵が打ち込んできた鉛弾を集め、それを型に入れ、唐本の紙で包み、弾薬を作っていたのである。敵から打ち込まれた鉛弾を集めるということは、死を覚悟しなければできないことである。1日に約1万2000発を作成し、開城までに約19万発を作成したといわれている。結果として籠城中に約260人の婦女子が弾薬で命を落としている。このように多くの婦女子の戦死者を出しながら、「戊辰の役会津殉難婦人の事跡」では233人とあることから、江戸末期は如何に女性の活躍が軽視されているのかが分かる。そのことから、今回の大河ドラマで女性の活躍をクローズアップする点は、評価できるのかもしれない。この籠城戦の時、男の家来の約200名が城を出て、逃げたという記録が残っていることから男性より女性の活躍が如何に凄まじかったが分かると思う。このことから、女性というものは、その時を生きようとする力が男性と比べ

て強いことが窺える。

このように凄まじい籠城戦であったが新島八重は、この会津戦争を生き延びることとなり、同志社英学校（のちの同志社大学）を創立する新島襄（じょう）と結婚することとなる。籠城した時は24歳だった八重も昭和7年まで生き、昭和7年7月、88歳の生涯を終えた。会津戦争を生き延び、後の世に影響を与えた女性として八重以外に若松賤子（しずこ）がいるので興味があれば、調べるのも良いと思う。

他に紹介したい思い出の一冊としては、初級編としては赤川次郎の「ふたり」（新潮社）、上級編としてドストエフスキーの「罪と罰」（岩波書店、新潮社ほか）などがある。これらに共通することは生きるとは何かを説いていることである。「女たちの会津戦争」も、如何にして生きるのか説いている。今、このような本を紹介したいのは、安心して生きること慣れすぎている人が多いように感じるからである。平和であることは良いことであるが、それにどっぷりつきすぎで平和ボケをしているように感じるからである。仕事をしないもの、自分の能力を高めようとしめないものがそうである。生きるということは、生かされているということである。諸説あるだろうが、私の考えで生きるとは、自分と世の中に還元できる能力を身に付け、考え、そして実行していくことであると思う。学生の皆さんにとって直近のこととしては、就職がそれに該当すると思う。学校で勉強し、それを応用し、そして仕事に活かしていくことが生きるということである。

新島八重は、壮絶な人生を歩んでも、結果として、日本の教育の礎を築くこととなった。それは、会津戦争という現在の人々が経験したことがないような苦労を体験したからこそ、我々が大変だと思うことも難なく潜り抜け、そのためにも教育が大切であると感じたのだと思われる。これは、生きるということを実践した良い例だと思われる。

最後に皆さんのこれからの活躍を祈り、思い出の一冊として紹介させていただいた。

平成24年度 学生図書委員名表

学科学年	任 期	機械工学科	電気電子工学科	情報工学科 (制御情報工学科)	都市・環境工学科 (都市システム工学科)
1	1 年	安 藤 達 也	川 野 航 平	内 田 倫 太 郎	佐 藤 克 哉
	前 期	眞 壁 拓 哉	工 藤 幸 輝	山 内 杜 夫	宮 川 莉 帆
	後 期	小 林 綾 斗	佐 藤 久 周	渡 部 孔 耀	高 木 諒 介
2	1 年	首 藤 義 晟	高 井 由 佳	吉 田 龍 矢	大 山 太 郎
	前 期	高 木 洸	佐 藤 祐 輝	小 谷 朋 生	小 野 将 寛
	後 期	高 木 洸	佐 藤 泰 貴	小 谷 朋 生	坂 本 春 樹
3	1 年	幸 和 範	久 積 新	三 浦 晴 成	川 合 綱 木
	前 期	瀧 口 直	今 留 丈 晴	嶋 田 裕 行	村 上 慶 行
	後 期	窄 口 昌 大	今 留 丈 晴	嶋 田 裕 行	村 上 慶 行
4	1 年	工 藤 啓 右	立 川 亮 太	甲 斐 桜 子	清 康 太 郎
	前 期	清 家 理 央	吉 武 夏 雲	長 生 ま ゆ み	下 津 航 輝
	後 期	藤 原 敏 博	宮 崎 太 希	長 生 ま ゆ み	下 津 航 輝
5	1 年	工 藤 敦 士	御 幡 大 河	○本 田 晶 子	内 堀 恵 梨 奈
	前 期	房 前 光 輝	中 西 和 也	◎浅 野 早 紀	松 下 明 寿 香
	後 期	房 前 光 輝	中 西 和 也	浅 野 早 紀	糸 永 諒 太

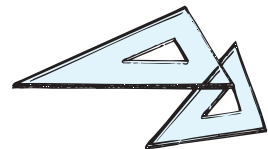
*上段が1年任期 ◎学生図書委員長 ○学生図書副委員長

平成24年度 読書感想コンクール入選者

	クラス	氏 名	作 品 名	著 者 名
第1位	4S	長 生 ま ゆ み	『六の宮の姫君』を読んで	芥 川 龍 之 介
第2位	1C	森 田 真 由	「車輪の下を読んで」	ヘルマン・ヘッセ
第3位	1S	増 田 花 乃	『かもめのジョナサン』を読んで	リチャード・バック
佳作	1M	川 合 正 志	『苦役列車』を読んで	西 村 賢 太
佳作	4M	廣 瀬 功 哲	『羅生門』を読んで	芥 川 龍 之 介
佳作	1C	三重野 綱 行	なによりも大切な命ー「生きてます15歳」を読んで	井 上 美 由 紀
佳作	4C	山 下 大 貴	『人間失格』を読んで	太 宰 治
佳作	1E	浜 野 佑 介	『Good Luck』を読んで	フェルナンド・アラウジョ・ベス
佳作	1M	田 仲 勇 大	『レインマン』を読んで	フライシャー・リアノー
佳作	1S	甲 斐 天 子	『アンネの日記』を読んで	アンネ・フランク

平成24年度 貸出上位者・クラス

順位	クラス	氏 名	貸出冊数	順位	クラス	貸出冊数
第1位	3C	村 上 慶 行	187冊	第1位	5S	385冊
第2位	2C	小 野 将 寛	145冊	第2位	3S	318冊
第3位	2S	小 谷 朋 生	116冊	第3位	1S	275冊
第4位	3S	大 友 洋	110冊			
第5位	4S	長 生 ま ゆ み	105冊			
第6位	4S	小 池 ほ の か	90冊			
第7位	5S	木 村 誠	87冊			
第8位	2S	山 田 雅 心	86冊			
第9位	1S	相 澤 瑠 奈	70冊			
第9位	1S	尾 崎 光	70冊			



編 集 後 記

図書館報128号の編集にあたり、大変慌ただしい時期にご多忙の中で原稿執筆を快く引き受けて下さった下さった方々に深くお礼を申し上げます。このようなご協力があったからこそ今回の図書館報を無事に発行することができました。今回の図書館報におきまして、平成24年度から着任された校長先生に読書への熱い思いを語っていただき、教養における読書の重要性を改めて思い知らされました。また、本校の学生図書委員会の活動や、シンガポールポリテクの受入れ事業をとおしての文化交流といった活動も新たに紹介させていただきました。このような内容が本校のことを外部の方により深く知っていただくために少しでもお役に立ったら幸いです。